ご声援に感謝！

連載小説もいよいよクライマックスへ

郷土の英雄 金子十郎家忠 特集

西多摩ゆかりの登場人物

「金子十郎家忠物語」は、現在の埼玉県入間市に本拠地を置き、平安時代末から鎌倉時代初期にかけて活躍した、西多摩にもゆかりの深い武蔵武士・金子十郎家忠を主人公にした連載小説。瑞穂町の渡辺和俊さん作、同町の榎本さきさんの挿絵で2015年7月から連載を開始し、現在、物語はさまざまな武士たちの生き様を描きながら「源平合戦」に突入、クライマックスに向けますます盛り上がりを見せている。主人公・金子十郎家忠の足跡を特集します。

（小峯佐知子）

金子十郎家忠の足跡

高間兄弟を討ち取る金子家忠

主人公の金子十郎家忠（1138～1216？）は、およそ900年前に瑞穂町殿ケ谷に館を構えた村山頼任のひ孫にあたる。家忠の父・家範から、現在の入間市のJR八高線金子駅近くに館を築き金子氏を名乗るようになった。

家忠は19歳のとき、「保元の乱」で初陣。後白河天皇側の源義朝（源頼朝の父）に従って、都の白河殿で崇徳上皇側の軍と戦い、大力で有名な高間兄弟と一騎打ちをし勝利するなど、勇敢な戦いぶりからその名を知られるようになった。

御車を覗き込む金子家忠（平治物語絵巻より）

平清盛が権力を握る契機となる「平治の乱」では、再び源義朝側について参戦。内裏に幽閉されていた二条天皇が女装して清盛のもとに脱出するのを見落とす失態を犯すも、汚名を晴らすため死を覚悟し平家軍に立ち向かう。

しかし、義朝は清盛に敗れ敗走。ともに兵を引き、途中で義朝と二手に別れて先を進むことになった家忠は、生き残った武蔵武士らとともに無事に故郷へ帰還することができた。一方、義朝は部下に裏切られ無残な死を遂げ、その息子・頼朝は捕らえられ、井豆に流され長年にわたる流人生活を送ることになった。

世の中は平清盛の天下となり、武蔵国も平氏の知行地となった。頼朝挙兵に応じた三浦一族の「衣笠城」（現在の横須賀）を攻める戦いで、家忠は平氏方として戦い21本の矢を受けながらも怯むことなく戦い、敵方から酒を贈られ称賛を受ける。

敵味方から称賛される金子家忠

その後、頼朝に臣従した家忠は源平合戦で源義経の下で奮戦し、その功から現在の伊予国（愛媛県）や播磨国（兵庫県）にある土地の地頭職を与えられた。頼朝上洛のときには警固役に選ばれるなど頼朝・頼家・実朝の3代の将軍に仕えたといわれている。

その子孫は戦国大名後北条氏に仕え、後北条氏滅亡後は紆余曲折の末、妻の実家の主家毛利氏に仕えることになった。その際に武蔵国にあった「金子氏文書」も山口県萩市へ移ったと伝わっている。

また、家忠の子・家広は現在の愛媛県新居浜市に移住し、その地を金子と名付け、金子城を築いた。伊予金子氏は豊臣秀吉の四国征伐まで約330年続く。その後、残った一族は長曾我部元親に保護され、大坂夏の陣で豊臣方として参戦するも敗れ、九州天草に逃げ延びたという。

金子十郎家忠関連略年表

11世紀	奥州の「後三年の役」で武蔵武士、源義家と共に戦う。朝廷から私戦とみなされ褒章がなく、義家が私財から武士たちに恩賞を出し、坂東での名声を高める
1118	平清盛誕生
1138	金子家忠誕生
1140？	平山季重誕生
1147	源頼朝誕生
1156	「保元の乱」 後白河天皇側の源義朝に従い、家忠初陣（19）
1158	武蔵七党・西党の平山季重、福生村を与えられる
1159	「平治の乱」 源義朝側の家忠、女装をして平氏の館へ逃げる二条天皇に気付かず、逃がしてしまう 源義朝が敗北し、源氏の武蔵国への影響力低下
1160	平清盛、武蔵国を知行国とする（息子知盛が武蔵守になり、平氏の武蔵国への影響力が増す）
1164	畠山重忠誕生
1167	平清盛、武士で初の太政大臣に
1174	源義経、鞍馬寺を出奔、奥州へ（武蔵国を通る？）
1180	「治承・寿永の乱」（源平合戦） 衣笠城合戦（現在の横須賀市）で家忠、平家方として畠山重忠と共に参加。21本の矢を受けながら戦い称賛される。その後、畠山重忠、源氏方へ。先祖が源義家から授けられた白旗を持参して頼朝を感激させた。家忠も源氏方へ。
1185	平家滅亡、鎌倉幕府成立 家忠、源義経の平氏追討に属し功績。武蔵国金子や伊予国新居などの地頭に任ぜられる 平山季重、後白河法皇から無断で任官、頼朝の怒りを買う
1189	「奥州合戦」 奥州藤原氏滅亡、源義経自害 平山季重功績、鎌倉幕府の元老として取り立てられる
1190	家忠、源頼朝が都で行った行列で、頼朝の牛車の警護役の一人に選ばれる
1191	畠山重忠、功績により「杣保」（羽村市～奥多摩町日原付近）を受領、御岳山に城を築く（武蔵御嶽神社社伝）
1199	源頼朝死去
1205	「畠山重忠の乱」（北条氏の有力御家人排斥のひとつ）
1207	北条氏、武蔵国の荒野開発 平山季重、武蔵国秋留橘郷の開発成功を祈念し、宝蔵寺（檜原村）を建立
1213	「和田合戦」　※和田義盛の一族が檜原村に落ち延びたとも
1212	平山季重死去（病死とも）
1216	金子十郎家忠死去と伝わる
1219	3代将軍実朝暗殺

羽村・青梅・奥多摩

清廉潔白な「坂東武士の鑑」
秩父党・畠山重忠

愛馬を担いで坂を下る重忠

秩父党（桓武平氏）、本拠地は埼玉県深谷市。遊女あさ妻とのロマンスなど数多くの伝説をもつ

石橋山の合戦では源頼朝に敵対したが、後に帰順。源平合戦、奥州合戦で功をたてた。教養も深く、1186年に源義経の愛妾・静御前が頼朝の命で鶴岡八幡宮で舞を披露したとき、重忠が銅拍子を打って伴奏したエピソードもある。

鎌倉時代から杣保（羽村～日原付近）と呼ばれた地域を「建久2年（1191）、重忠が功により賜り御岳山に城を築く」と武蔵御嶽神社の社伝が伝えている。青梅市内には同神社の国宝「赤糸縅大鎧」、寺名が重忠の法名「勇讃即清」から取られた即清寺、あきる野市網代の旧鎌倉街道沿いの「駒繋ぎ石」、重忠の死の前に日の出町の「妙見宮」が光で危機を知らせたなど、西多摩各地にゆかりの地が残る。

◆その後：元久2（1205）年、北条氏の謀略により謀反の疑いをかけられ重忠は悲劇的な最後を迎え、杣保の地域は幕府直轄領となったとも。重忠の旧領と名跡は北条政子の姉妹にあたる重忠の未亡人（娘という説も）が足利氏と婚姻して引き継がれ、室町時代に入り畠山氏内部の家督争いが「応仁の乱」勃発の一因となった。

福生・秋川流域

顔はふわふわ？驍勇無双の武士
西党・平山季重

不審な御車を止める金子家忠と平山季重

西党（日奉氏）、本拠地は日野市。保元の乱から壇ノ浦の戦いまで金子十郎とともに活躍した

1180年源頼朝挙兵に従い、各戦で功績をあげる。保元3年（1158）に福生村を与えられ、秋留橘郷の開発成功を祈願し檜原村の宝蔵寺を建立。あきる野市横沢の大悲願寺、同市草花の小宮神社を創建したなど伝えられている。

無断で後白河法皇からの任官を受け、頼朝から「平山季重、顔はふわふわとして、とんでもない任官をした」（『吾妻鏡』より）と叱責されたが、数々の功績から鎌倉幕府の元老に取り立てられた。3代将軍実朝が誕生するときには、鳴弦（弓を使って邪気を払う儀式）の大役を任された。日野市では「平山季重まつり」も開催、昨年新キャラ「平山君」がお披露目されたもよう。

◆その後：平山氏は幕府と一定の距離を置くことで、北条氏の創業の功臣粛清を逃れ、戦国時代まで続く。戦国時代には後北条氏に仕え檜原城の城主となったが、豊臣秀吉の北条征伐で落城、平山氏は奥多摩方面へ落ち延びたという。現在でも関東には平山氏の子孫が多いとか。

あきる野市の武士 西党・小川氏

連載小説にはあまり出てこないが、あきる野市にも東秋留周辺を本拠地とする西党・小川氏がいた。

古代から東秋留には朝廷の命で馬を育てる小川牧があり、小川氏は牧の管理や国衙の役人をしながら小川郷を開発。二宮神社の神主職を掌握するなど、勢力を広めていった。

源平合戦では、同じ西党の平山季重らとともに源義経の配下として参戦し、数々の戦いで奮戦する。戦後、後白河法皇から季重らとともに勝手に任官を受け、源頼朝から叱責されたが、その後も御家人として勤めを果たした。

鎌倉幕府と後鳥羽天皇との間で起きた「承久の乱」では、小川季能が最大の激戦地となった宇治川の戦いで功を立て、恩賞として肥後国（熊本県）の土地と薩摩国（鹿児島県）甑島（こしきしま）を与えられた。

甑島には季能の庶子が赴き、同地に土着した。甑島小川氏は島津氏に従い、中世を通しその地を治め、太閤検地の所行替えで小川有季の代に1595年薩摩国田布施へ移住した。有季は憤死したとも、謀略で討たれたともいい、甑島小川氏は有季の代で終焉を迎えた。

一方、武蔵国の嫡流は早い段階で記録が絶えている。有力御家人三浦氏と関係が深かったため、三浦氏と北条氏の「宝治合戦」（1247年）で三浦氏に味方し、所領を没収されたのではないかと推測されているという。

関東の混乱が生み出した坂東武士

秩父党率いる武蔵七党

■武蔵七党

平将門の乱、平忠常の乱などを経て、坂東で一国や数郡にまたがる巨大な武士団が誕生した一方、武蔵国では現在のあきる野市にあった小川郷を中心に、ほかは山地で小規模な開発が行われただけだったせいか大領主は現れず「党」と呼ばれる大小さまざまな十以上の武士団が誕生した。

武蔵七党にどの党を入れるかは諸説あるが、武蔵武士の総棟梁といわれる秩父党（畠山重忠）以外は郎等（家臣）を従えられない中小規模の領主ばかりで、連載小説の衣笠城の場面で瀕死の矢傷を受けた金子十郎家忠のように、所領を守るため当主自らが命がけで戦いに臨んでいた。

「親や子が死んでも、その屍を越えて立ち向かってくる」と恐れられる戦いぶりは、領地を守ることに懸命な、中小勢力ばかりの武蔵武士だからこそのものだった。

■源氏と平氏と坂東

関東ではじめ、高望王を祖とする桓武平氏が広く根付いた。その後、房総の平忠常の乱に源頼信・頼義（頼朝の5代前）が派遣され坂東武士と源氏が主従関係を結ぶようになる。頼義は桓武平氏の嫡流・平直方の娘と婚姻し鎌倉を譲られ、東国での桓武平氏の権威も得ることになった。

奥州の2度の乱では、源氏とともに「坂東の精兵」が参戦し、その内の「後三年の役」は源義家（頼朝の高祖父）の私闘だと朝廷は恩賞を与えず、義家が私財から武士らに褒美を与え、坂東武者と源氏の間に「重代の恩顧」という観念が芽生えた。

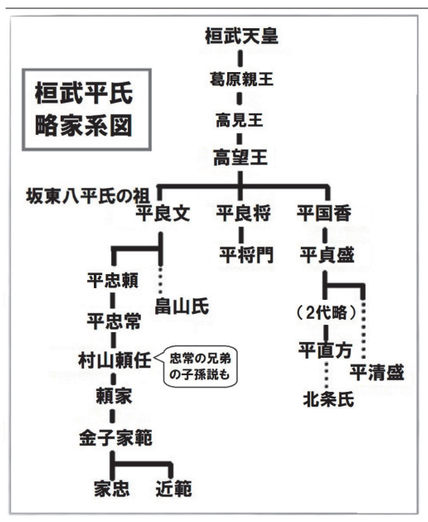
後年、源氏は一族の内紛で衰退し、その間に平清盛を輩出する伊勢平氏が都で力をつけることになる。伊勢平氏は正盛、忠盛、清盛と三代をかけて、貴族に劣らぬ教養を身に着け、軍事力・経済力と全ての力を使い低い立場に置かれる武士の地位向上を目指した。

保元の乱、平治の乱を経て、平清盛の天下になると、武蔵国は清盛の知行国となり、武蔵武士らも従うようになった。しかし、平氏政権は地方武士と都を繋ぐ窓口という役割を十分には果たすことができず、地方武士らの不満が高まることになってしまった。

■板東から日本各地へ

自分の領地を一心に守るイメージのある鎌倉時代の武士も、領地と都を行き来したり、源平合戦などの褒章で新しい土地をもらうなどして日本全国を移動している。明治維新の立役者長州藩の毛利氏、キリシタン大名大友宗麟で有名な九州の大友氏ももとは現在の相模国（神奈川県）を本拠地としていた。

武蔵国から現在の愛媛県に移り住んだ金子家忠の息子・家広以外にも、あきる野市の西党・小川氏が薩摩国（鹿児島県）に移り戦国時代末まで勢力を保ち、畠山重忠の兄も薩摩国に行き伊知地氏の祖となったという。



梅がなくても華やかに

福生神明社秋季例大祭

▲梅の木が伐採された神明社の境内
左が本殿、右に演芸大会が行われた神楽殿

福生市の奥多摩通り沿いにある「福生神明社」（宮本豊員宮司）で19日、秋季例大祭が開催された。

梅の名所として知られる同神社はウメ輪紋ウイルス（PPV）感染を受け、今年の夏に境内の梅の木20本をすべて伐採した。少し広々として見える境内では、神事の後に福生天王ばやし、午後3時からは同神社崇敬会主催の奉納演芸大会が、変わらず賑やかに上演された。

同神社崇敬会（昭和40年発足）の田村勍一会長は「今年で14年目を迎えた梅まつりを最後に、シンボルだった梅の木がなくなり、元の神社のたたずまいに戻りました。雰囲気は変わっても、神明社は地元の氏神様として、皆様を見守り続けています」とあいさつ。

台風通過後の秋晴れの中、市内や近隣住民がかっぱれやカラオケ、舞踊など37演目を披露し、来場者を楽しませた。

Nとぴ Nishitama's ニュートピックス PR

リフォーム相談会
防災コーナーも好評
あきる野　エコビルド

あきる野市雨間の建築会社「エコビルド」（平野寿一社長）は9月16日と17日、「リフォーム相談会」を同社で開催。クリナップ、リクシル、パナソニックのメーカー協力のもと、キッチンやトイレなどの展示ほか、消臭効果のあるタイルや簡単にリフォーム可能な窓などの説明が行われていた。

また、同時開催でヘルメットや非常用圧縮毛布、簡易トイレなどさまざまな防災用品が展示された。

会場には、倒壊した家屋などの被害状況の様子をパネル展示し、自然災害に危機感を持ち、災害への備えが大切であることを伝えていた。

同社は、防災イベントなどに足を運び、情報を収集。防災訓練などに積極的に参加し、情報を発信している。

防災用品の問い合わせは同社（042・558・0751）へ。

お任せ下さい。あなたの愛車。

コクボのサービス軍団
メカニック全員国家認定整備士
ビギナーからベテランまでスペシャリスト勢ぞろい！
一般修理・車検はもちろん、どんなことでもご相談ください（難しい修理こそ得意です）。カスタムペイント・スペシャルバイク製作、保証修理、無線機取付、ETC・NAVI取付などなど 他店でお求めになられた愛車でも承ります。
当地区正規ディーラー
コクボモータース
☎042-645-6105 八王子警察近く　コクボモータース 検索